

## 【第1部】

### 沖縄国際海洋博覧会 1975・海洋文化館とオセアニアの文化復興

国立民族学博物館長 須藤健一

#### I. 沖縄国際海洋博覧会の民族資料収集

##### 1. 海洋文化館に展示する海民の生活用具と大型カヌーや家屋等の収集

海洋文化館は、アジア太平洋地域の海を舞台に暮らす人びとの生活と精神文化を紹介するために1975年に建てられた、長さ114mの無柱無窓の広大な空間である。その空間を海洋文化の展示場とするために、1) 島嶼世界の多様な生活用具と2) 消えゆく大型カヌー等の大型造形物が計画的に収集された。

これらの民族資料の収集は、1) 収集調査団による「定着収集」と2) NAV(日本映像記録)のスタッフ等による「一般収集」の2チームで行われた。1) 収集調査団は、故梅棹忠夫(初代民族学博物館長)を団長に若き民族学・人類学徒10名で結成され、1974年8月～12月に現地調査に基づく収集活動で約1500点の資料を収集した。主な収集地は、ポリネシア(タヒチ、トンガ、サモア)、メラネシア(ニューヘブリデス、パプアニューギニア)、ミクロネシア(パラオ、ヤップ、トラック、マーシャル)、インドネシア(スラウエシ)、マレーシア(サラワク)、フィリピン(パラワン)の各地であった。

一方、2) NAV(日本映像記録)による収集は、地域を代表するカヌー、舟、神像、家屋等を戦略的に選定して20点を収集した。収集地と主な対象資料は、タヒチの儀礼用カヌー、ハワイの戦いの神・クー神像、ソロモンの戦闘用カヌー、パプアニューギニアのクラ・カヌー、ラカトイ、インドネシアのビス・ポール、トラジャの舟形家屋、フィリピンの家船などである。

#### II. 海洋文化館のしかけた文化復興

##### 1. オセアニアの海洋文化復興の兆し

1970年代からポリネシアを中心に、古代の人びとの生活文化と海洋文化の象徴である大型カヌーの復元とそれを駆使する伝統的航海術の復活を試みる動きが顕著になってきた。その代表的な各地の兆しは下記のとおりである。

- 1) ポリネシアとメラネシアからの伝統カヌーと伝統的航海術の消滅し、ミクロネシアのサタワル島とプルワット島の航海師が実践している外洋航海が注目される。

1970年 ルイス・ルッパンによるサタワルとサイパン間800Kmの伝統航海の復活

- 2) ハワイの研究者らによる古代ポリネシアのカヌー復元

1973年ポリネシア航海協会設立

1975年ホクレア号とタヒチの儀礼用カヌー(海洋文化館展示用)の建造

1979年タヒチで古代ダブルカヌーの発掘

- 3) 太平洋芸術祭の伝統カヌーと航海術の重視

1972年太平洋芸術祭がフィジーでスタートしオリンピック年ごとに開催(今年がグアム)

1980年ポートポレスビーの芸術祭で伝統カヌーの競争

1992年クック諸島の芸術祭でカヌーページェント

各国・地域は古代カヌーを復元・建造して参加、以降開催地へのカヌーの集結・カヌーセッションが定例化（カヌー・ルネッサンス）

## 2. 新しい「海の道」をひらいたサタワルの航海師

サタワルのふたりの航海師、ルイス・ルッパンとマウ・ピアイルクは、ミクロネシアの海を越え、これまでに航海経験のない海域へ伝統的航海術を駆使して挑戦し、成功を収めた。

### 1) チェチェメニ号の海洋博覧会場への航海

- ① 1975年ルイス・ルッパンと5人の航海者が「新しい海をひらく」
- ②サタワルの外洋カヌーによる航海術の優秀さとその国際的評価の高まり
- ③1988年ルッパンによる福岡のアジア太平洋博覧会への協賛航海
- ④1997年サタワルの航海師による航海術修得儀礼(pwo)の復活、2007年サタワル島で

### 2) ホクレア号によるハワイ人の故郷タヒチとその他のポリネシアの島への航海

- ①1976年マウ・ピアイルクの指揮のもと15名のクルーがタヒチへ実験航海
- ②1979年からピアイルクは弟子のナイノア・トンプソンに伝統的航海術を本格的に伝授
- ③1980年タヒチ(ピアイルク同乗)、ナイノアは85年NZ、92年ラロトンガ、95年マルケサス(ハワイロアで)、99年ラパヌイなどの往復実験航海を達成

### 3) サタワルの偉大な航海師の功績

- ①ルッパンは日本へ、ピアイルクはハワイからポリネシアの島々へ、数千キロに及ぶ未知の大海原を乗り切る航海を成し遂げた
- ②ふたりの偉業は、サタワルの航海術がポリネシアの航海に応用可能であることを実証した。つまり、オセアニアの伝統的航海術の知と技は基盤において共通性を有することが明らかになる。ルッパンの海洋博への航海に触発され、ピアイルクのハワイでの航海術の伝授と航海者の育成により、オセアニア各地で大型伝統カヌーの建造と伝統的航海術の再生により海洋文化復興が実現した。

## III. チェチェメニ号と民博

海洋博の終了後、民博は1977年の開館に向けて世界の民族資料の収集を積極的に進めた。オセアニア展示においては、海を制覇した大型カヌーの展示をメインテーマに収集を展開し、その過程でチェチェメニ号が最優先の収集対象になってきた。

### 1. オセアニア展示の「海の世界」の目玉

ミクロネシアの大型カヌーの世界初の博物館展示

### 2. チェチェメニの故郷サタワルでの伝統的航海術と海洋文化の調査研究

1978年～80年、民博研究者によるフィールドワーク

### 3. 島嶼間の交通に近代的な船舶輸送と古来のカヌーによる輸送手段の併存

自らの知識と技術による島環境への適応と持続性の維持

## おわりに

1. 海洋文化館は、海に暮らすオセアニアの人びとの生活、島嶼間航海と儀礼的世界や世界観を展示したユニークな世界第一級の博物館
2. 海洋文化館の創設は、オセアニアの人びとが失われた大型カヌーの建造・復元し、伝統的航海術を復活させ、祖先が成し遂げた移住のルーツとルートを実験航海によって実証した。これは、今から3500年前に始まる太平洋を越えたグレートジャーニーへの誇りと豊かな海洋文化を今に蘇がえらせ、自文化へのアイデンティティを強める文化復興である。
3. 海洋博覧会・海洋文化館の創設は、当時困難であった若手文化人類学徒の海外フィールドワークを可能にし、各自の調査研究を深化、発展させる、人材養成の機能を果たした。